2025年8月3日 礼拝メッセージ

聖書:ホセア書1章1～11節
説教:ひとりのかしらを立てて上る

はじめに

今日からしばらくホセア書を見てまいります。旧約の預言者と言えば、エリヤとかエリシャはよく知られていますが、ホセアはどちらかと言えばそれほど有名ではない。今日初めてここを開いたという方もいらっしゃるでしょう。ホセアは北王国イスラエル出身で、紀元前760年頃に預言者として活躍したと言われていますから、いまからの時代から見ればかなり昔の人という印象です。そんな古い時代の預言者に語られた主のことばが、今日の私たちにどんなかかわりがあるのかと戸惑うかもしれません。しかし聖書は、罪人を救うために神が語られた真理のことばです。新しいとか古いとか、そんなことは関係ありません。ここにも今の私たちが聞くべき主のみことばが記されているはずです。主はどのようなことを語っておられるのか。ともに見てまいります。

１　ホセアの時代

１）北イスラエルと南ユダ

そこで1章1節から読むわけですが、王の名前が次々と繰り出してきて、だれがだれだかわかりません。「ちゃんと勉強しなければ聖書は読めないのか。」そんなふうに腰が引けてしまうかもしれません。でも大丈夫です。王さまの名前をいちいち覚える必要はありません。今日の箇所は、二つのことだけをおさえておけばよい。

その一つ目。イスラエルはもともと一つの国でしたが、ダビデの息子であったソロモンが亡くなって間もなく紀元前931年に北と南の二つに分裂してしまいます。北王国はそのままイスラエル、南王国はユダと名乗り、それぞれ別々の道を歩んでいきます。ところが、北王国は紀元前722年にアッシリアの手によって滅ぼされてしまいます。そうするとホセアは、北王国がもうすぐ滅ぼされていく、その頃の人だったということになります。一つ目にこのことをおさえておきましょう。

２）イズレエルで起きたナボテの畑事件

おさえておくべき二つ目のこと。今日のところにイズレエルという名前が出てきます。4節のところに、ホセアの最初に生まれた子どもの名前として出てくるのですが、どうしてイズレエルとしたかというと、4節後半にこうある。「しばらくすれば、わたしがイズレエルでの流血のゆえにエフーの家を罰し、イスラエルの家の王国を終わらせるからだ。」いったい「イズレエルの流血」とは何のことか。このことは列王記第一21章に詳しく描かれていて、いわゆる「ナボテの畑事件」と呼ばれるものです。イズレエルにナボテという一人の信仰者が住んでいました。彼は豊かなぶどう畑をもっていたのですが、アハブという北イスラエルの王がこの畑を見て欲しくなり、お金を出すから売ってくれと交渉を持ちかける。ところがナボテは先祖の土地を売るなどとんでもないと言って断ってしまう。そこでアハブと妻のイゼベルは共謀し、「ナボテは神と王を呪った」という嘘の情報を流し、石打の刑で殺してしまい、畑を奪ってしまった。そういう事件です。だれが聞いてもとんでもない話しだと憤るでしょう。もちろん神もそうです。この事件が起きてからおよそ100年経ったホセアのときになっても、神はアハブとイゼベルがしたことを覚えている。このことを正しくさばかなければならないと考えておられた。これがおさえておくべき二つ目のことになります。このふたつのことをおさえながら、主がホセアに語ったみことばを見ていきましょう。

２　主のことば

１）姦淫の女と姦淫の子らを引き取れ

2節。「主はホセアに言われた。「行って、姦淫の女と姦淫の子らを引き取れ。この国は主に背を向け、淫行にふけっているからだ。」」

このゴメルについてはいろいろ議論があるようなのです。ホセアが結婚したときゴメルは姦淫の罪は犯していなかったけれど、結婚した後で罪を犯すことになる。そういう意味で「姦淫の女」と呼んだ。そのような解釈で落ち着いています。実際後のほうでゴメルが罪を犯す場面が出てきます。

それはそれとして、ここで疑問になるのは、どうして神はホセアに姦淫の女をめとれと言われたのか。その理由です。そのことについては2節後半にこう書かれています。「この国は主に背を向け、淫行にふけっているからだ。」

具体的にいえば、北イスラエルが唯一の神である主を捨てて、異教の神々であるバアルを拝み、供え物を献げてきたことを指しています。王であったアハブとその妻イゼベルは、このバアルの預言者

を育成するための神学校を建て、反対に主の預言者たちを徹底的に迫害しました。そんなことを聞くと、ある方は言うでしょう。「他の神を拝んでも何が悪いのか。人には信仰の自由があるはずです。聖書はなんて狭いのだろう。」これが今の時代の常識かもしれません。しかしバアルを拝んだ結果、何が起きたのかを見てから善いのか悪いのかを判断すべきです。アハブとイゼベル、何をしたか。先ほども言ったナボテの畑事件を起こした。本当の神をないがしろにしていくとき、正義が無視され、罪が力を得ていく。その結果、人が意味もなく殺されていく。そのことを神は、淫行にふけっていると表現して徹底的にその罪を憎みます。ホセアに、姦淫の女をめとりなさいと言われたのも、神がどれほどにイスラエルの罪に関心を持っておられるのか、そのことをわからせるためでした。

２）三人の子の名前

このことは、三人の子どもの名前のことからも伺うことができます。最初の子どもはイズレエル。先ほど見たとおり、血なまぐさい記憶が呼び覚まされる、できれば聞きたくない名前です。二人目が、ロ・ルハマで、「イスラエルの家をあわれまない」という意味でした。三人目はロ・アンミで、「あなたがたはわたしの民ではない」という意味。このように三人の子どもの名前は、ことごとく人の罪を象徴するようなものだった。

さて、ホセアはどうだったのでしょう。あらかじめ姦淫の罪を犯すと告げられた女性を妻に迎え、三人の子どもたちには罪を象徴するような名前をつけなければならない。かなり複雑な気持ちだったのではないか。自分は預言者であるという使命感があったとしても、なにも悩みませんということではなかったはずです。もしここで話しが終わるのであればどこにも希望がありません。もちろん終わらない。この先がちゃんとある。ホセアが悩みながらも、それでも主のみことばにしたがって前に進んでいったのは、やはりこの先にある光を見ていたからだと思うのです。

３　さばきと回復

１）ひとりのかしらを立てる

その光はどこにあったのか。10節後半にこうあります。「「あなたがたはわたしの民ではない」と言われたその場所で、彼らは「生ける神の子ら」と言われる。」

神はイスラエルを見捨てたはずなのに、そのすぐその後で、「彼らは「生ける神の子ら」と言われる」とある。正反対の意味のことばが、一緒に並んでいるので、めまいがしそうなくらいです。神はさばきのことばを語りながら、同時に希望のことばも語っていることは明らかです。罪を徹底的に責めながら、同時に罪の赦しと回復の道を語っています。

２）その地から上って来る

11節もそうです。「ユダの人々とイスラエルの人々は 一つに集められ、一人のかしらを立てて その地から上って来る。まことに、イズレエルの日は大いなるものとなる。」

北と南に分裂してしまったイスラエルは、再び一つに集められていく。これまでは、北は北、南は南でそれぞれに別々の王様を立てて、別々の道を勝手に歩んでいました。しかし、やがて再び一つとなるときが来る。そして一つとされたイスラエルは、ひとりのかしらを立てるようになるというのです。これはだれのことなのか、預言のことばはいつもわかりにくい。

でも私たちは知っています。神のひとり子であるイエス・キリストが、人となられて、イスラエルの王、かしらとなられた。この方は天から降って来られた方ですが、十字架でさばかれ死んだ後、墓に葬られたけれど三日目によみがえられ、弟子たちが見ている前で地の上から天に上られました。実際にイエスが来られた、そのおよそ760年前にホセアはこのことを預言したのです。

私たちは罪人です。「あなたがたはわたしの民ではない」と言われても「確かにそのとおりです」としか言えません。私たちは神に背いてきました。「わたしはあなたがたを二度とあわれまない」と言われても何も反論できず、ただ絶望するしかありません。ところが、実はそこから希望が始まっていくのです。罪を悔いる者を神は絶対に見捨てない。むしろ、あなたが立っているそのところ、イズレエルというもっとも悲惨で暗い場所であなたは救われて、やがて大いなる日を迎えると言われる。これが私たちの希望です。

人の目から見るなら、私たちはこの世で最も惨めで希望がない人間にしか見えないかもしれない。ところが実は、主にあって、私たちはこの世で最も希望があることになる。なにしろ主が約束してくださったのです。これほど確かなことはありません。ホセアがつらい境遇に置かれながらも前に進めたのは、この希望を知っていたからではない

ですか。神は罪を憎みむとともに、悔いる者を赦して下さる。彼もそのことは知識として知っていたでしょう。しかしホセアは単なる知識ではない。妻と子どもたちのことを通して、他人事としてではなく、まさに自分のこととして神のさばきと赦しを体験しながら、希望の光を見る者となりました。

　私たちもおなじです。このように導いてくださる主とともに歩んでまいります。